

---

# 君にしかできないっ！

中い

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

君にしかできないっ！

### 【Nコード】

N1931Z

### 【作者名】

まい

### 【あらすじ】

とある魔術の世界。少し名の売れた孤独な魔術師の青年は、とある人助けを機に人生を狂わせてしまう。

…これは好転か？悪化か？

## 変化の前に

【〽〽変化の前に】

こんな夜は、アレに限る。

彼は、レンガの壁を撫でながら、ゆっくりと、地下室へと続く薄暗い階段を下りた。

左手には三十センチほどの『魔法の杖』が持たれており、杖の先にはあたりを照らすには十分な光がともっている。

地下室へと降りた彼は、一度、杖を振る。

すると、あたりの蠟燭と、天井の小さなシャンデリアに乗せられた蠟燭の全てに火が灯った。

地下室は一瞬にして、優しい橙の光に包まれる。

そこは大きな倉庫だった。

倉庫には等間隔でいくつかの棚が配置されており、棚にはガラスボトルが並んでいる。

「今日はこいつだな」

その中から一本、彼はボトルを取り出した。

光一つ取り残さず反射するほど美しく磨かれたボトルの、赤いラベルには、白い文字で「ミュンジューズ 1246」と書かれている。

彼はアルコールが嫌いだ。

摂取推奨年齢である二十歳に達していないというものもあるが、アルコールは魔術者の体中を巡る魔術線を侵し、魔力の流れを乱雑にして魔術の精度を下げてしまうからだ。

しかし彼は、アルコールとは比べ物にならないほど、このジュースを愛している。

秋が旬のミュンは、桃色をした完全なハート型の果実で、甘みが強く、その影にツンと刺すような酸味が覗く味を持っている。

このジュースは、そんなミュンを絞ってジュースにし、何年も寝かせたものだ。

寝かせれば寝かせるほど、ミュンの甘みは穏やかなものとなり、独特の酸味はその棘を丸くする。

彼が今、手に取ったのは、その百年ものだ。市場価格にして、20000グランの代物である。

ちなみに参考として、この国で最もベターなジュース『ライフギル』は10グラんで買える。

重ねて参考として、この国の平均年収は150000グラムだ。

彼がボトルを手に取り、階段出口のすぐ隣の壁に貼り付けた紙に取り出したボトルのナンバーを書き込むと、来た時と同じように杖を小さく振って全ての光を杖の先に集めて消し、階段が上がっていた。

階段を上がって一階に出ると、まず木のダイニングテーブルが目飛び込んでくる。

白いテーブルクロスがシャンデリアの光を照り返した。

彼はテーブルにミュンジューズを置くと、キッチンでポトフを浅い皿に盛り付け、テーブルへと運んで、一人で食事を始める。

「やはり、ガロージャの百年物は格別だな」

そんな独り言も、誰の耳にも入らず、宙を舞った。

こうして彼は、また一日を終える。

孤独な、  
一日を。

## 変化の予兆

【〓〇〓〓変化の予兆】

相も変わらず完璧な朝だ。

彼は、満足気な表情で食卓にトーストを並べ、ウインナーが三本と目玉焼きが乗った白い皿を同じく食卓へ並べた。

彼こだわりのコーヒーを配膳すれば、完璧な朝食である。

「さて、頂くとしよう」

齢十八とはいえ、元貴族。

礼儀正しく食器を取り、料理に手をつけようとした。

刹那、ドアが何度も叩かれる。

彼はつい眉を顰めた。

起床時の空腹は、少なくとも彼にとってとても不快なものだったから。

だが、客人をもてなすのも礼儀だ。

ドアを叩く音が家中に響く中、ハンガーに掛かったマントを羽織り、腰の右側に自慢の杖『ヴルカーノの六番』をホルスターで吊ると、覗き窓を開いて外を見た。

しかし、相当背が低いのか、覗き窓からでは誰の影も確認できない。

仕方ないと、彼はドアを開いた。

「遅れて済まない」

そう言った直後、彼の瞳に真っ赤なコートが焼きついた。

彼は、すばやく一步距離をとり、ホルスターから六番を抜く。

目前の人間は、赤いコートに赤いベスト、裾を絞った白いズボンを着用していた。

この服装は、彼が最も嫌うものだ。

「その服装：リバルド帝国軍の魔術研究ギルドの人間と見受けるが、貴様は何用でここを訪れた。言っておくが、私はもう魔研ギルドに戻る気は無いぞ」

強い語勢で言い放つ。

彼は祖国である、リバルド帝国の魔術隊の技術研究を担う『魔術研究ギルド』の所属であったが、過去、ある事件を経てそこを辞めた。

だが、フリーランスの魔術師となつてからも、魔術研究ギルドの魔術師は何度も彼を引き戻そうと、乱暴な手段も厭わずに彼にアプローチし続けたのだ。

彼はそんな事もあり、魔術研究ギルドの魔術師を一層、嫌うようになった。

ところが、目前の帝国魔術師は、上目遣いで、彼に訴えかけた。今までの帝国魔術師からは想像できない様な涙声で。

「ヴェルガ！！ 君だけが頼りなんだ！ 我々を助けてくれ！」  
そこに居たのは、美しすぎる金の短髪を持つ美少女だった。

吸い込まれそうな青い瞳が彼：ヴェルガその人を見つめている。

背中には、大型の軍用の杖である「正式採用十八式魔槍」が背負われていた。

「い…いきなり何を言うんだ」

「我々を助けてくれ！」

彼、もといヴェルガは、困惑した頭のまま、ともかくこの少女の話聞くことにした。

「良いから、中に入って話を聞かせるんだ」

魔力の流れを絶つ機能を持ったマントを羽織ったまま、ヴェルガは彼女を自らの向かいに座らせた。

朝食は、魔法で移動させてすぐ近くの棚にしまっておいた。

「話を始めてくれ。私も用事の途中でね。…さあ、飲みたまえ」

ヴェルガは、水を彼女の目の前に出したコップに注ぎながら告げる。

「ありがとう」

嗚咽を含んだまま礼を言って、両手でコップを持ち、少女は水を飲んだ。

一息ついて、少女は話を始める。

「私が出かけている間に…ギルドの皆が…襲撃を受けたんだ…皆を助けて欲しい!」

「襲撃…か。それは軍からか？ それとも名の知れた山賊か？ ま

さか野良の魔術師ではあるまい」

「それが…魔獣に…なんだ…」

「魔獣？ そんなものが何故あの地域に居るんだ。あのあたりどころか、魔獣なんて探しても見つからない様な代物だろう」

その落ち着き払った言葉を聞いて、少女は身を乗り出した。

両手で持っていたコップの水は、容赦なくヴェルガに降りかかる。

「だからこそ…軍や騎士団では対抗できないんだ!この頼み事は…君にしか…君にしかできないっ!」

ヴェルガは、その熱意に再び眉を顰めながら、右目のモノクルの水滴を胸元から取り出したハンカチでぬぐった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1931z/>

---

君にしかできないっ！

2011年12月7日04時06分発行